シンポジウム２

# LOVE in Letter
# ～受血者と献血者を繋ぐ～

近藤勇気，伊藤基之，末吉和夫，金子健一，関　延幸，荒川宣夫，脇田　久，浅井隆善
（千葉県赤十字血液センター）

## １．はじめに

献血者にとっては献血された血液がどのように使用され，役立っているかという認識が十分ではなく，一方で，受血者には，献血者への感謝の思いがあるにも関わらず，その思いを伝える手段が限られているのが現状である。そのため，当血液センターでは，献血推進業務に従事している若手職員を中心として，受血者から献血者へ，そして献血者から受血者へのメッセージを交換することにより，献血者自身の献血意欲の高揚に繋げ，より能動的な献血にご協力いただけるように働きかけることを目的としてプロジクトを企画したので報告する。

## ２．方　　法

（1）メッセージの収集と紹介

献血者から，および，受血者からのメッセージの収集と紹介は以下の手順で行った。

①協力いただける病院に依頼し，受血者からの手紙をメッセージとして収集する。
②受血者からのメッセージを献血ルーム内に掲示する。そして，受血者に対するご自身の思いをメッセージに書いていただき，回収ボックスに投函していただく。
③献血者から集まったメッセージを印刷して「レシピエント通信」として発行し，本プロジェクトに協力いただける病院に，推進課や学術課経由で持参する。
④受血者は献血者からのメッセージを「レシピエント通信」で読み，献血者への思いをメッセージ用紙にご記入していただいく。
⑤ご記入いただいたメッセージを学術課，供給課，推進課のいずれかを経由し血液センターで回収する。
⑥回収した受血者メッセージを献血ルームに再掲示する。

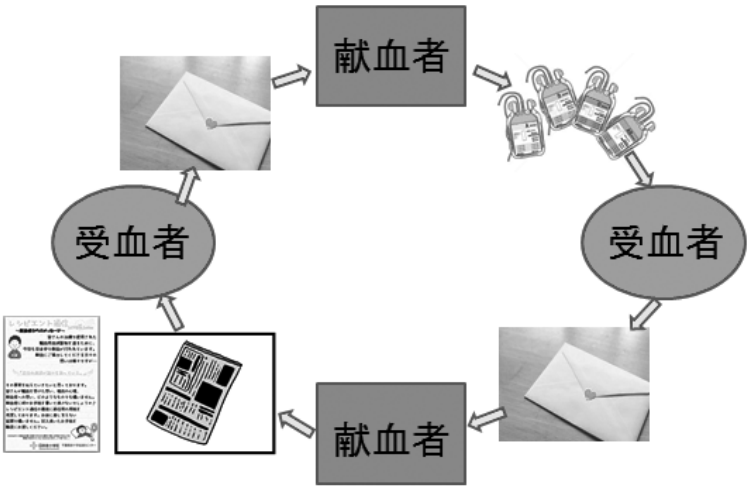


図１

すべての手紙において，匿名で個人を特定できる情報が記載されていないことを条件にしているため，SNSへの投稿も促している。その際，#loveinletterで投稿していただくことによって，SNS上での検索ができるようにしている。

（2）病院に対しての活動方法

新たな取り組みをすることには少なからず抵抗がある病院が多かったが，当血液センター職員が既に関係を築いている部署から相談を持ちかけることとした。学術課からは病院の検査部門，推進課からは病院の総務部を通して医師や看護師に話をする機会を得て，最終的には院内輸血療法委員会の議題としていただいた後に承認を得ている。病院内で説明をするときは，病院に対するプレゼンテーション用の資料を作成して説明をしている。

（3）医療機関での倫理委員会承認

病院に対して推進をしていてとくに難しいと思ったことに，個人情報の観点から倫理委員会での承認を得ることがあった。

この課題に対しては依頼文と実施要項を作成し，実施要項を用いて説明することで，目的や方法を理解しやすいよう工夫している。さらに血液センター所長名で病院長あてに依頼文を提出することで，信頼を得るとともに，血液センターとしても血液事業本部の倫理委員会に相談することも必要ではないかとも考えている。

（4）医療機関職員の仕事が増える懸念

今回のプロジェクトを実施することで医療機関職員の仕事が増えるのではないかとの懸念に対しては，受血者へのアプローチ方法を変更して改善することを試みた。具体的には，メッセージの受け渡しを病院職員からの手渡し方式から，デイルーム等で受決者がメッセージを得たり発送できたりする方法に変更した。デイルーム等に設置していただくのは，LOVE in Letter啓発ポスター，レシピエント通信，返信用封筒とその回収箱の３点である。

返信用封筒は料金後納郵便受取人払い契約を郵便局と結んでいるので，受血者は手紙を書いた後，病院内に掲示してある返信用封筒に手紙を入れポストへ投函するだけで良くなった。この方法によって，病院職員から手渡ししていただく手間が省けるとともに，献血者への手紙を書いてくださった受血者からのメッセージを，匿名で血液センターが直接受け取ることができている。

上記のような改善を重ねていくことで，他の血液センターでも取り組みやすくなるのではないかと考えている。

## ３．結　　果

このプロジェクトのような活動は，当センターのどこの部署でも実施していなかったため，献血推進業務に従事している若手中心の新規プロジェクト若手中心であり，既存キャンペーンの形にとらわれない発想で進めていくことができ，若手の成長という観点からも本プロジェクトは有意義な活動であった。

現在，献血者から受血者へのメッセージは500通以上集まっている。そして，受血者からのメッセージはご協力いただいている全病院で増え続けている状況である。集まったメッセージから，献血者自身の献血意欲の高揚に繋がり，より能動的な献血にご協力いただけるようになったことがわかった。またSNSへの投稿を促すことによって，当センターからの広報だけでなく，＃loveinletterで投稿した献血者の周辺への推進も可能となって

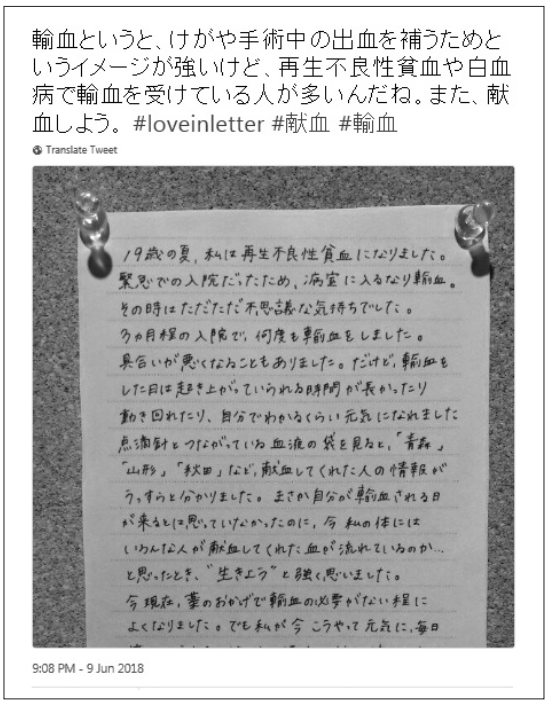


図２

いる。実際の投稿を見ても，献血推進に有効的であると判断できる。

献血者から受血者へのメッセージの中に，「今までなんとなく献血に来ていたが今後はより一層献血に協力したい」等のメッセージが多く寄せられた。本プロジェクトを実施する意義は上記のような献血者からのメッセージに込められていると思われる。

## ４．考　　察

献血者が献血会場から帰るとき「ごちそうさま。」と言われることがある。私はこの言葉に対して，とても強い違和感を感じる。この違和感は献血という尊い活動の結末を，献血者に対しての説明不足によって招かれた実態であると考えられる。物品などの記念品で一時的に献血者が増加するのは良いことだと思う。しかし，今，必要とされているのは献血を現段階よりも深く理解し，能動的にご協力いただける環境を全国で整えることではないのだろうか。本プロジェクトを全国的に展開し，献血者が受血者のことを常に意識し，より能動的に献血にご協力いただけるよう，今後もこの活動を継続していきたい。